

ピクチャレスク・ジャパン — 世界が見た明治の日本 —

上映作品解説資料

本資料は、下記のイベント当日に会場配布した『NFAJ』ハンドアウト 第005号 ユネスコ「世界視聴覚遺産の日」記念特別イベント[上映と講演] ピクチャレスク・ジャパン—世界が見た明治の日本—(2020年10月24日発行)および『MoMAK Films 番外編 ピクチャレスク・ジャパン—世界が見た明治の日本—』(2021年1月29日発行)に、WEB公開用の修正を加えたものです。本資料の掲載内容(文章、画像など)の一部およびすべてについて、権利者の許可なく改変、複製、販売、出版、送信、放送等、方法の如何を問わず第三者の利用に供することを固く禁じます。詳細は国立映画アーカイブホームページの[サイトポリシー](#)をご確認ください。

目次

『日本の祭列』について 解説：伊藤廣之(元大阪歴史博物館学芸員)	P.1
『ピクチャレスク・ジャパン』の横浜映像について 解説：平野正裕(元横浜開港資料館・横浜市史資料室員)	P.2
『日本の稲刈り』について 解説：米川智司(東京大学大学院農学生命科学研究科准教授)	P.5
『京都の祭』について 解説：村上忠喜(京都産業大学文化学部教授)	P.6
『鵜飼』について 解説：卯田宗平(国立民族学博物館准教授)	P.11
『日本のアイヌ』の映像について 解説：森岡健治(平取町立二風谷アイヌ文化博物館長)	P.12
1914年日本の軽業師たち —ヨーロッパで活躍していた日本人軽業師・曲芸師たち群像— 解説：大島幹雄(サーカス学会会長)	P.17
『ピクチャレスク・ジャパン』『京都の祭』『鵜飼』『日本のアイヌ』補遺 作成：富田美香(国立映画アーカイブ)	P.18

イベント概要

ユネスコ「世界視聴覚遺産の日」記念特別イベント
[上映と講演]
ピクチャレスク・ジャパン — 世界が見た明治の日本 —
[Screenings and Lectures] Picturesque Japan: Japanese Landscape as Seen by the World
2020年10月24日(土) - 25日(日) 12:00pm - | 3:45pm -
会場: 国立映画アーカイブ 長瀬記念ホール OZU
定員: 105名(入替制・全席指定席) * 24日12:00pmの回は100名
主催: 国立映画アーカイブ、文化庁、独立行政法人日本芸術文化振興会
特別協力: 英国映画協会(British Film Institute)
協力: 株式会社橋本ピアノ
イベントの詳細はNFAJホームページをご覧ください
www.nfaj.go.jp/exhibition/unesco2020/







令和2年度日本博主催
共催型プロジェクト

[上映作品] *すべて英国映画協会 (British Film Institute) 所蔵作品・デジタル修復版、日本語・英語字幕つき、ピアノ伴奏つき上映。

『日本の学童たち』 *Japanese School Children*
1904(英、ヘップワース・マニユファクチャリング社) | 2分

『日本の葬列』 *A Japanese Funeral*
1904(英、ウォーリック・トレーディング社) | 1分

『日本の祭列』 *Japanese Procession of State*
1904(英、ヘップワース・マニユファクチャリング社) | 1分

『日本の舞踊』 *Japanese Dancers*
1905(英、不明) | 2分

『保津川の急流下り』 *Shooting the Rapids on the River Ozu in Japan*
1907(仏、パテ・フレール社) | 7分

『ピクチャレスク・ジャパン』 *Picturesque Japan*
1907(仏、パテ・フレール社) | 9分

『日本の祭 横浜開港五十年祭』 *Japanese Festival*
1909(仏、パテ・フレール社) | 6分

『日本の稲刈り』 *Rice Harvest in Japan*
1910(仏、パテ・フレール社) | 8分

『京都の祭』 *The Rice Festival in Kyoto*
1911(仏、パテ・フレール社) | 8分

『鵜飼』 *Fishing with Cormorants. Isle of Yeso. Japan*
1911(英、チャールズ・アーバン・トレーディング社) | 10分

『日本人の中で』 *Among the Japanese*
1911(米、シーリグ・ポリスコープ社) | 2分

『日本のアイヌ』 *The Ainu of Japan*
1913(米、シーリグ・ポリスコープ社) | 3分

『日本の軽業師』 *Japanese Acrobats*
1914(英、不明) | 6分

伴奏 | ピアノ: 柳下美恵

[講演] *講演は、2020年10月24日12:00の日に講師が登壇して行い、その講演を撮影したビデオを、以後の回では上映。

「ピクチャレスク・ジャパン — 映画を通じた外からのまざり —」
講演者: 小松弘(早稲田大学文学学術院教授)

「『日本の祭 横浜開港五十年祭』について」
講演者: 平野正裕(元横浜開港資料館・横浜市史資料室員)

「『日本のアイヌ』の映像について」
講演者: 森岡健治(平取町立二風谷アイヌ文化博物館長)

「1914年日本の軽業師たち —ヨーロッパで活躍していた日本人軽業師・曲芸師たち群像—」
講演者: 大島幹雄(サーカス学会会長)

MoMAK Films 番外編

ピクチャレスク・ジャパン — 世界が見た明治の日本 —
Picturesque Japan: Japanese Landscape as Seen by the World
2021年2月20日(土) - 21日(日) 2:00pm -
会場: 京都国立近代美術館 1階講堂
定員: 先着30席
主催: 京都国立近代美術館、国立映画アーカイブ、文化庁
独立行政法人日本芸術文化振興会
特別協力: 英国映画協会(British Film Institute)
イベントの詳細はMoMAKホームページをご覧ください
www.momak.go.jp/JapaneseFilms/2020/momakFilms-picturesquejapan.html



『日本の祭列』について

解説：伊藤廣之(元大阪歴史博物館学芸員)

* 2020年10月24日の資料に加筆修正



座摩神社の法被



永代濱、肥物商の提燈

1. 座摩神社の渡御

「座摩神社」の法被から、座摩神社の渡御列と推定される。井上正雄『大阪府全志 巻之2』（大阪府全志発行所、1922年）によると、座摩神社の祭は4月22日が献花祭、7月22日が夏祭、10月22日が秋祭で、「夏祭には従来石町2丁目の御旅所に神輿の渡御ありて祭儀最も壮麗なりが、今はなし。」（349頁）とある。つまり、お旅所への渡御は7月の夏祭のみであり、1922（大正11）年には渡御は無くなっていたとされる。また、『官国弊社特殊神事調 三』（神祇院、1941年）によると、「明治八年迄は石町の御旅所に神輿並に御撫物の渡御ありて盛大を極めたり。」（132頁）とあり、江戸時代からの渡御は1875（明治8）年まで続いたとされる。そのため、1904年時点では夏祭の渡御はすでに廃絶していたと考えられ、本作で撮影された渡御は形を簡略化したものか何かではないかとみられる。なお坐摩神社宮司の渡邊紘一氏によると、フィルムに写る宮司とみられる人物は、当時の「渡辺敏雄」宮司（1847年7月19日～1928年2月2日）に似ている、との教示を受けた。『浪華摘英』（1915年、18頁）に肖像写真が掲載されている。

2. 永代濱・肥物商

神社の西側には、瀬戸物・肥料（干鰯）・乾物の問屋が集中し、永代濱は、肥料・乾物の問屋街が荷揚げをする浜で、周辺には同業町が形成されていた。「肥物商」は、そうした問屋街の人たちと推定される。「永代濱」は場所の名前だが、大阪人の感覚では、肥料・乾物商などの同業者の町を想起させる言葉として用いられていた。



「大阪市附堺市全図」（大村徳次郎著『第五回内国勲業博覧会』小島亀吉、1902年所収）に加筆（作成：伊藤廣之）

3. 撮影地

大阪では東西の道（「通り」）がメインストリートで、各家の玄関が向かい合っている。渡御列の背景の土蔵は、道沿いにある程度長く続いているようにみえることから、「通り」とは考えにくく、住居の壁や土蔵の壁が続く南北の道（「筋」）と思われる。

4. 「座摩神社」と「坐摩神社」

近世の名所図会や、明治から昭和初期までの文献では、「座摩神社」表記が一般的だった。「坐摩神社」の表記は、大阪国学院編『府社現行特殊慣行神事』（大阪国学院、1932年）に見られる。神社は1936年5月21日に、社格が「府社」から「官弊中社」に昇格し、この時は「坐摩神社」であった。

『ピクチャレスク・ジャパン』の横浜映像について 解説：平野正裕(元横浜開港資料館・横浜市史資料室員)

I 「横浜写真」と映像

横浜は、幕末に貿易港となった時点から人為的につくられたまちであり、交易の伸張を主たるエンジンとして富と人口を吸収していった。19世紀のうちは、生糸や茶の輸出をつうじて取引額は他港を圧し、国内最大の外国人居留地が置かれて、文明開化の窓口となった。富裕な外国人相手の商売も盛んになった。欧米では「ジャポニスム」の流行によって“日本”への嗜好が高い時代でもあった。美術商をつうじて、浮世絵や絵画、仏像・仏画ばかりでなく、陶磁器や七宝、漆芸品などの工芸品が海を渡っていったが、その精緻なものの一部は横浜やその周辺で作られた。

19世紀の居留外国人や旅行者は、国内旅行が制限されていたために、各地の風景・風俗を写真に収め、そのプリントを水彩絵の具で着色して、漆や皮革で製本し、なかには豪華に表紙を螺鈿細工で飾った。このような「横浜写真」が内外人が経営する写真館のビジネスとして成立し、19世紀日本を視覚的に紹介する歴史資料となった。港湾施設や外航船、ホテルなどの文明開化を伝える場所や、それとは逆の伝統的な寺社など、横浜のまちは「横浜写真」の生産地として、他都市と比較し相対的に多くの被写体として残った。

しかしながら、19世紀末に登場した映画 Motion Picture の世界では、明確に横浜であると判定できるものは乏しい。米国議会図書館の「Paper Film Collection」には、エジソン社が1898年に撮影した“Street Scene in Yokohama, No.1” “同 No.2” “Theatre Road Yokohama” “Going to the Yokohama Races” “Returning from the Races”などの映像が残されている（その一部はドキュメンタリー工房が編集したビデオ『キネマの夜明け2 撮影隊ニッポンに行く』の素材として利用された）。しかしながらそこには、「文明開化のまち」や伝統的な施設を撮すという「横浜写真」にありがちな視点は感じられない。“Street Scene in Yokohama, No.1”は山下居留地に行き来する人力車や馬車を主に、“同 No.2”は路上の市民と市中音楽隊の行進を主として撮している。“Theatre Road Yokohama”は伊勢佐木町通りを撮影したものであるが、ひるがえる劇場の幟に焦点をあてるわけでもなく、外国人の撮影隊に珍しげに群がる子どもや市民を撮すにすぎない。エジソン社のフィルムは、日本固有の交通手段である人力車、馬車や自転車、市中音楽隊、さらには外航船への石炭積み込み光景など—Motion Picture であるから言うまでもないのではあるが一動きのある風俗を中心に撮られたものであった。欧米をはじめとする海外の映画観客には、横浜の居留地に展開する西洋建築などは興味をひく対象ではなかったに相違ない。

II 『ピクチャレスク・ジャパン』(1907)の横浜映像

このフィルムにおいて、横浜を撮影した映像と確認できるのは4分08秒～4分48秒にいたる「JAHRESFEIER DER MANDSCHRISCHEN SIEGE」（日露戦 旅順陥落祝勝）と、5分39秒～7分39秒にいたる「JAPANISCHES BEGRABNIS」（日本の葬列）の2箇所である。

このうち後者と同一の映像が、Thomas Armat Collection にもあり、前出「キネマの夜明け2 撮影隊ニッポンに行く」（以下「夜明け2」と略記）の素材として使われている。「夜明け2」では1900年ころの「横浜のとび職人組頭の葬式」とタイトルをつけ、撮影場所を羽衣町付近とナレーションする。この邦題の「葬式」は厳密には「葬列」であろう。『ピクチャレスク・ジャパン』は1907年のフィルムとあり、私見では日露戦争戦勝記念祭の映像が含まれることから、1907年が妥当ではないかと考える。しかしながら先行して「夜明け2」に1900年頃とされているので、この後者から解説を加えたい。

葬列は、「南太田 東部睦會」の旗を先頭【01】に、「成田山 成輝講」の旗が続く【02】。開港以後の横浜には、成田山新勝寺(真言宗)や浅草寺(天台宗)、本願寺(浄土真宗)などの大寺院の別院が進出したが、大火や関東大震災の被害などで撤退や移転・縮小を余儀なくされ、約150年間同じ場所で、相応の様態を保持しているのは、野毛山の成田山別院だけである。

さて「夜明け2」が付与したタイトル「横浜のとび職人組頭の葬式」であるが大いに疑問がある。「夜明け2」のナレーションでも表明しているのであるが、Thomas Armat Collection の映像には「1900年ころ ニッポン」とあるだけで、詳しいことはわからないとのこと。「とび職人組頭」の葬列とすれば、映像の中に相応の根拠がありそうであるが、葬列に印半纏の人物が幾人か登場する以外には「とび職」と位置づけるものは見あたらない(もっとも印半纏をもって「とび職」と結びつけるのも短絡である)。葬列の長さから「組頭」と地位の高い者に結びつけ、また成田山別院にあるとび職の記念碑と関連づけただけのものではないかと判断する。

『ピクチャレスク・ジャパン』を詳細に検討すると、【03】の画面に、被葬者の名前と思われる「江澤金五■」と、その画面右下に「ファブルブランド」の名札を読むことができる。ファブルブランド(Favre-Brandt)は山下居留地 175 番の横浜を代表する時計商であった。「江澤金五■」はこの商館に勤務する日本人である可能性があり、長大な葬列からして、商館内で重きをなした人物かもしれないが、現在のところ江澤某を解く材料はみつからない。映像には葬列の終わりに登場する棺【04】に続き、洋装の日本人男子が幾人もかたまって認めることができる【05】。当時の日本人一般の洋装化は、男性は帽子や外套、女性は日除けパラソルやショールなどの部分導入にとどまり、庶民に洋装は普及していない。棺に続く洋装の集団は、被葬者が洋館づとめであった可能性を示唆するものであり、「とび職人組頭」との仮説はいっそう薄らいでいくのではあるまいか。

次に問題となるのは、撮影場所である。「夜明け2」では羽衣町付近とナレーションしているが、これもその根拠は映像からは見つけがたい。羽衣町は、横浜第一の盛り場である伊勢佐木町界隈の一角を構成し、厳島神社や横浜第一の劇場「羽衣座」がある繁華な地区である。この映像からはそのような繁華なさまはうかがえない。

葬列の先頭に登場する「南太田 東部睦會」「成田山 成輝講」の旗の、南太田と成田山を地図上に結んだ地区は大岡川左岸。そして映像にあるような街路樹のある直線道路は、日ノ出町付近と断定してよからう【06】。開港以来この地区には幕府の「太田陣屋」が置かれ、兵力が駐屯して洋式調練を取り組んだ。明治になって陣屋が廃止されると、見事な直線道路をもつ「日ノ出町」が誕生した。横浜写真にも、桜の街路樹のある「HINODECHO YOKOHAMA」と明記された1枚が残されている【07】。南太田と成田山の地理的關係を考えれば、羽衣町に寄り道するルートはさらに根拠がなくなる。



【01】

Courtesy of BFI National Archive



【02】

Courtesy of BFI National Archive



【03】

Courtesy of BFI National Archive



【04】

Courtesy of BFI National Archive



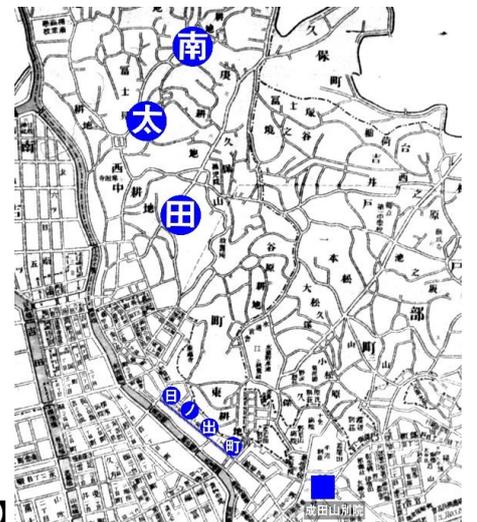
【05】

Courtesy of BFI National Archive



【07】

横浜開港資料館所蔵



【06】

次いで、「JAHRESFEIER DER MANDSCHRISCHEN SIEGE」（日露戦 旅順陥落祝勝）である。日露戦争は、アジアを植民地化していた西洋の大国に戦勝した大事件であり、産業化を実現して「脱亜入欧」を目指してきた近代国家日本の成果として、当時の大衆にとって大いに称揚されるべきことであった。それは活動写真の登場と写真印刷の大衆化にもとづく映画や画報類による視覚的理解が、戦勝を実感させることに作用したことが文化史上に大いなる意味をもった。その他の映像としては、「伊勢佐木町」「山下町」の旗がひるがえるなか、出征する兵士を大勢の市民が見送る短いフッテージが、たとえば「日本の戦争」（1963年毎日映画社制作・日活配給）の冒頭などで見る事が出来、NHKの放送番組に使われることがあるが、その元のフィルムについては不詳。また旅順攻略の砲撃の映像は今日でも多用される。中国大陸や日本海でのいくつかの戦争局面で、大国ロシアを打ち負かしていくニュースを大衆は快哉をもって迎えた。実際は戦争遂行能力は限界に達しており、戦勝後のポーツマス会議で、日本が賠償金を放棄して講和を結んだことに不満が爆発し、日比谷焼き討ち事件など都市民を中心に暴徒化する事態が生じたことはよく知られている。

横浜でも、1904年(明治37)9月5日遼陽占領、翌5年1月5日旅順陥落、3月18日奉天占領、6月2日日本海海戦戦勝、のそれぞれで祝賀大会が開かれている。この「日露戦 旅順陥落祝勝」の映像は、参加者の着込んだ服装からみて冬季であろう。日露戦勝のパレードとして独自に催されたものというよりは、旅順陥落を祝して横浜公園で開催された祝賀会に関わる光景と考える。撮影場所は、現在の伊勢佐木町一丁目。撮影当時と言えば、伊勢佐木町二丁目から一丁目入口方面を撮したものである【08】。

伊勢佐木町の入口方面に進んだ位置から撮影した絵はがきが残っている【09】。勤工場の横浜館と帝国商品館があり、両者の間の遠方、派大岡川を隔てた位置に三階建ての人形浄瑠璃席「富竹亭」の黒い大屋根が写る。映像では、向かって左の電柱の左奥に看板のみ板状に見えるのが横浜館である(横浜館は1911年7月に演芸場横浜館となり、福宝堂～日活の上映館となる)。行列の先頭には、「長者八 長義会」「長者七 旭桜会」の旗を持つ者が認められる【10】。長義会・旭桜会は、町内会の呼称であろうか。伊勢佐木町を行き来する者はほとんど和装で幾重にも着込んでいる者がいる【11】。これらの事情から判断して、映像は参加者2万人(?)と新聞が報じた、横浜公園での旅順陥落戦勝祝賀会に参加した長者町七丁目・八丁目の住民たちが、伊勢佐木町通りを通過して帰る光景を撮したものとみるのが自然ではなかろうか。映像の終わりにキリンビールの幌馬車が写るのも興味深い【12】。



【08】



【09】

横浜開港資料館所蔵



【10】

Courtesy of BFI National Archive



【11】

Courtesy of BFI National Archive



【12】

Courtesy of BFI National Archive

『日本の稲刈り』について

解説：米川智司（東京大学大学院農学生命科学研究科准教授）

田の水が抜けていない湿田で、鎌を使った稲刈り。刈り取った稲を湿らせないように、竹かごを逆さまにして台にしている。現在の日本では、コンバイン収穫がおもなので、湿田はほとんどなくなっている。本来は、ここまでが稲刈り（収穫工程）。



Courtesy of BFI National Archive

稲架（はさ）掛けなどの乾燥工程を経て、稲を千歯扱ぎで脱穀（稲束から籾（もみ）を外す）し、粗い篩（ふるい）で藁（わら）くずなどを選別（より分け）。千歯は千把とも記す。もともと千歯は「枵把（せいわ）（小さな木杭の集まり）」と記す。ここから本来は、収穫工程ではなく、調製工程。



Courtesy of BFI National Archive

当時の「籾すり機」の土臼（つちうす）での作業の様子。土臼は、上臼と下臼に分かれていて、上下の隙間の摺り面で籾すりをして、籾殻（もみがら）を外す。摺り面は木（通常は桜）の薄い摺り歯と粘土で構成され、製粉用のひき臼（そば用などの石臼など）よりも、やわらかく摺ることで、籾殻が外れた玄米を傷つけないようになっている。土臼は、おもに竹と土できている。もともとは「礪（する）」と記す。



Courtesy of BFI National Archive

映っているのは関東式の唐箕（とうみ）のため、撮影場所は関東甲信越・東北あたりで、少なくとも関西以西ではないと考えられる。もともと唐箕は「颯扇（とうみ）」と記す。唐箕は、風力選別機（風選。しいな（実っていない米）や籾殻などを吹き飛ばして、玄米をより分ける）の代表的な機械で、現在でもコンバインや籾すり機の部品などとして活躍している。



Courtesy of BFI National Archive

あおり（大うちわ）で、風を用いた選別。通常は、唐箕のあとに万石（千石通し。摩擦力の違いと粒径で選別する機械）を使うのが（江戸時代から）一般的。



Courtesy of BFI National Archive

最初の脱穀で用いた篩よりも目が細かい篩を使って仕上げている。この後、俵に詰めて貯蔵したり、木臼などで精白（精米）して白米にしたりする。



Courtesy of BFI National Archive

『京都の祭』について

解説：村上忠喜(京都産業大学文化学部教授)

京都・島原太夫道中

室町時代に成立した島原は、幾度となく移転を繰り返し、現在地(現京都市下京区)に廓を構えたのが江戸初期のことである。廓の中でも売れっ子の太夫が正装で練り歩く太夫道中は、江戸時代初め、寛永年間ころまでは行われていたといわれるが、以後中絶し、明治維新後に再興された。維新後、島原太夫道中は京都の晩春の行事として有名で、往時には沿道に多くの人がつめかけた。

まず映像に写るのは十名ほどの芸子たち。皆扇を目にかざして陽光を避けている。島原にも数は少ないながら芸子がいた。通りは定かではないが、道中は島原の歌舞練場から坊城通りを南行し、島原大門が残る花屋町通を西行するので、このどちらかの通りでの様子を撮影したものと思われる。



Courtesy of BFI National Archive

芸子に続いて、花車が行く。花車を曳くのは島原廓のオトコシ(男衆：男性の奉公人)であろうか。総2階建てとなっている町家の2階席にも大勢の観覧客が顔をのぞかせている。



Courtesy of BFI National Archive

次に太夫が見えるが、その前に付き人を伴った幼女が歩く。幼女は、島原で修業中の禿(かむろ)で、まだ禿になりたての6, 7歳の幼子にみえる。歩みがゆっくりなのか禿の前で行列が切れており、沿道の様子がわかる。沿道には簡便な柵というか埒が設けられており、観客が通りに入り込まぬようにしていることがわかる。通りに柵を設けることは、明治期の祇園祭の山鉾巡行の写真にも見えている。

(祇園祭の場合は、昭和になるとそうした柵は見られない)また沿道の観客に、女性や子供の姿が多いことは印象的だ。普段は夜の世界に棲む彼女たちを、陽の光の下で見物するのはどういった意識であつたのだろうかわからぬが、今でいうなら有名な芸能人を見に行くような感覚だったのではないか。



Courtesy of BFI National Archive

太夫にはオトコシが大きな傘をさしかけ、女中が寄り添う。三本歯の黒塗りの下駄を履き、脚を大きく外側に出しながら弧を描くような独特の歩き方である。これを「八文字を踏む」という。太夫はキッと前を向いたまま歩んでいる。行列の中を羽織袴に山高帽やソフト帽をかぶった男性たちが往来するが、廓の関係者か。道中行列の最後の太夫を傘止めといい、名妓が務めるが、残念ながら映像には収められていない。



Courtesy of BFI National Archive

『京都の祭』 京都・稲荷祭神幸行列

この映像は、全国の稲荷社の総社である伏見稲荷大社の神幸列を撮影したものである。神幸列は、神が神輿に遷され、本社から御旅所に移動する際の行列のことを指し、京都や関西地方では御出(おいで)と呼称される。伏見稲荷大社は京都市中の南方に鎮座するが、面白いことに境内周辺地は同社南方に鎮座する藤森神社の氏子地域である。伏見稲荷大社の氏子地域はおおよそ3kmほど北方の東西両本願寺周辺をはじめとする京都駅を挟んだ南北の地域で、ほとんどが鴨川の西岸に位置するのである。御旅所もずいぶん離れた東寺近辺にあり、そのため神幸列も長い道のりを巡幸する。

この映像は七条大橋を渡る神幸列を撮影したもので、撮影者は七条大橋西詰南側の伏見稲荷大社松明殿あたりにカメラを構え、北東を向いて撮影している。背景に見えるのが東山の山並みで、八坂の塔が写っている。稲荷祭神幸列は、江戸時代から明治にかけては鴨川東岸の伏見街道を北上し、七条大橋で鴨川を渡っていた。七条大橋西詰南側に現存する伏見稲荷松明殿では、大松明を焚いて神幸列を迎えたのである。その列がコースを変更したのは明治43年(1910)からなので、この映像の撮影は明治42年(1909)を下限とすることは間違いない。長年の巡幸路の変更を可能にしたのは、稲荷新道の敷設であった。明治28年(1895)、建都1100年事業の一環である第4回内国勸業博覧会にあわせて、路面電車(のちの市電)が京都駅から伏見まで敷設される。路線名は稲荷線であるが、伏見稲荷大社前を通るわけではなく、京都駅から竹田街道を南行して伏見港に至るというものであった。そこで伏見稲荷大社からまっすぐ西へ幅4メートルの道路を通し、軌道が通る竹田街道と直結する稲荷新道が通されたのである。稲荷新道敷設により、七条大橋よりも下流の勧進橋で鴨川を渡河し、東九条村など稲荷氏子地域を巡幸列が巡ることが可能となった。

榊：大正期には、西本願寺の寺内町の一部に当たる下京第23区(植柳学区)から奉仕された。列の背景に写る欄干の形状から、この橋は七条大橋に間違いない。欄干の形状から、大正2年(1913)に完成する新大橋以前の旧橋であることがわかる。



Courtesy of BFI National Archive

大幣(おおぬさ)：5本。大正期には、東本願寺の寺内町の北側に位置する下京第18区(修徳学区)から奉仕した。



Courtesy of BFI National Archive

剣：5振りを1振りずつ青侍が抱え持ち、それぞれに付き人がつく。



Courtesy of BFI National Archive

『京都の祭』 京都・稲荷祭神幸行列

画面手前を右手から左手へ、頭上運搬で何かを運ぶ人の姿が映りこむ。画面右手には写ってはいないが伏見稲荷大社の松明殿があると思われる。時折画面を横切る人影は、松明殿に参詣した者が行列に復帰している様子ではなかろうか。



Courtesy of BFI National Archive

五色錦小旗：5本。



Courtesy of BFI National Archive

馬上の神官に続いて、「保榮會」と記された布をかけた釣台が行く。



Courtesy of BFI National Archive

狩衣・烏帽子姿の一团。鞆鼓(かっこ)を首から下げた者の横に傘持ちが歩く。後ろに釣太鼓、大太鼓が続き、それぞれ横に傘持ちがつくので、この傘は楽器にかけられたものか。その後ろに袴姿の男性が十数名随行する。何者かは不明だが、おそらくは氏子の役員であろう。その次に「金鱗組」と記された布をかけた釣台が行く。



Courtesy of BFI National Archive

錦蓋(きんがい)：5基。これは神輿に遷された神霊が、神輿から外に出る際に用いられるものだが、通常は使用することはない。その脇に竿にかざした鳳鳥(ほうちょう)があるが、これは神霊を錦蓋に遷す際、錦蓋にかざして神霊の存在を示すために用いる。その後ろに櫃が担がれる。大正期には、西本願寺の寺内町の一部に当たる下京第16区(淳風学区)から奉仕した。



Courtesy of BFI National Archive

神輿：1基。稲荷の神輿は5基あるが、そのうちのひとつ。



Courtesy of BFI National Archive

■調査協力：伏見稲荷大社、坂田満(坂田会)

■参考文献：江馬務(1929)『改訂日本歳事史・京都の部』内外出版印刷

『京都の祭』 滋賀・長浜曳山祭

湖北の春の盛りに繰り広げられる長浜曳山祭は、豪華な山の意匠とともに、山舞台での子供歌舞伎の上演が人気の祭礼行事である。山は一見してそれとわかる独特のつくりである。舞台部分は大きく三面に開くという、開口部が極端に大きくつくられ、子供歌舞伎を見せようという意識が強く働いた構造となっている。舞台の上には、複雑な屋根型の亭(ちん)がのり、この亭に囃し方が乗り込む。可動式の曳山の構造としては上部が重くなり堅牢とはいえないが、祭礼の華やかさの演出を第一義に考えた構造なのである。映像には12基の山がそろった様子が写されており、場所はおそらく長浜八幡宮境内と思われる。大正8年(1924)からは曳山は6基ずつ隔年で見られるようになるので、この映像はそれ以前の撮影になることは確実である。また明治42年(1909)から3年間は電話線の架線工事により曳山の巡行は行われなかったが、いざ架線工事が終わってみると、電話線が曳山に引っ掛かり巡行ができなくなってしまった。そこであらためて電柱立て替え工事をおこない、工事終了後の大正4年(1915)には、12基の曳山が長浜八幡宮境内に勢ぞろいする。この映像は、その時に撮影された可能性を残すものの、先の稲荷祭の神幸列の撮影時期が明治42年(1909)以前であることは確実なので、長浜曳山祭も同時期に撮影されたとしたなら、12基揃う曳山の様子からして、明治41年(1908)以前の撮影の可能性も否定できない。またこれらの映像(島原太夫道中、稲荷祭神幸祭、長浜曳山祭)が一連の撮影だとするなら、三者とも明治41年以前の撮影ということになる。

面白いことに、映りこんでいる大勢の観客は、曳山の方を見ずにカメラの方を窺っている。おそらく足場を組んで三脚を立て、カメラを大きくパンニングする撮影に皆興味津々であったのだろう。

人々が歩く。男性が圧倒的に多い。後ろに見えるのは孔雀山。



Courtesy of BFI National Archive

八幡宮に練りこむ曳山。手拭いで頬かむりをする曳き手たちは、長浜近在の農家の方々である。曳かれているのは翁山。八幡宮入り口に「○酸肥料」と記されたのぼり幡が風にそよいでいる。長浜曳山祭は、江戸時代に浜縮緬で巨利を得た長浜の町人たちの財力を背景に成立したが、曳山祭の執行には、他の都市祭礼同様、町人だけでなく、近在の人々の協力を得て執行された。ゆえに近在の村々からの人出で大いににぎわったので、肥料屋の宣伝も気合が入っているのだろう。



Courtesy of BFI National Archive

ここから全曳山をパンニングしながらの撮影になる。最初の山は孔雀山か。次に長浜曳山の中では、唯一船形をした特徴的な山である猩々丸が並んでいる。月宮殿は屋根型が特徴的な曳山であるが、残念ながらフレーム外でよくわからない。柱に飾り金具がないように写っているが、これは露光の関係なのではないか。向かって左側の柱には、飾り金具らしきかけが写る。

- ①青海山 ②春日山 ③諫鼓山 ④翁山 ⑤高砂山 ⑥萬歳楼か鳳凰山 ⑦常盤山 ⑧寿山 ⑨鳳凰山か萬歳楼 ⑩月宮殿(?) ⑪猩々丸 ⑫孔雀山



Courtesy of BFI National Archive

『京都の祭』 滋賀・長浜曳山祭

猩々丸の舞台での子供歌舞伎の様子。



Courtesy of BFI National Archive

- 調査協力：橋本章(京都文化博物館)
- 参考文献：滋賀県長浜市教育委員会長浜曳山祭総合調査団(1996)『長浜曳山祭総合調査報告書』
長浜市史編さん委員会(2000)『長浜市史 第4巻』

『鵜飼』について

解説：卯田宗平(国立民族学博物館准教授)

* 卯田氏の複数メールをもとに構成：NFAJ富田

鵜匠の人数や鵜舟の構造、ウミウの数、背景の山並み風景などを総合的にみると長良川における鵜飼であると考えられる。鵜飼の映像としては「最も古い時代のもの」であるといえ、以下の点が分かることから、大変貴重な映像である。

- ・映像に写っている鵜籠や鵜舟、篝火、腰蓑や漁服などがいまの鵜飼のそれらとほとんどかわっていないこと。
- ・数艘の鵜舟が同時に漁をしている様子が、いまの「総がらみ」という漁法とあまり変わらないこと。
- ・手縄を使った鵜飼の様子がみてとれること。
- ・数艘の鵜舟で漁ができるほど、アユの遡上があったと想定できること。

また、以下の点から、撮影用に出漁した可能性も考えられる。

- ・昼間であれば篝火は不要であるが、篝にマツがいくつも刺さっていること。
- ・帆立舟は下流の鵜舟を上流に引き戻していくためのものだが、漁の最中に上流にむかう舟が写っていること。

鵜匠宅で飼育しているウミウを鵜籠に入れる場面。鵜籠の構造はいまの鵜籠とほとんどかわらない。背後には篝火に使用するマツや、漁で使用する手縄が映っている。山下哲司鵜匠の自宅風景によく似ている。



Courtesy of BFI National Archive

ウミウが入った鵜籠を担いで、川岸に係留している鵜舟までもっていく場面。現在の長良川プロムナード(いまの鵜飼ミュージアム前)の整備前の風景によく似ており、写真の奥に見える橋は古い長良橋のように見える。



Courtesy of BFI National Archive

漁の準備をしている。ウミウを鵜籠から取りだし、鵜籠のうえで首結びを付けている。鵜舟のうえには鵜籠が4つほど置かれている。



Courtesy of BFI National Archive

ウミウをつかった漁。鵜匠が手縄をつかってウミウの動きをコントロールする。両頭型の鵜舟は長良と関、木曾でおもに使用されている。背後に見える帆立舟は鵜舟を上流に引き戻していくために使用するものだが、この場面では漁の最中に上流にむかう帆立舟が映っている。昼間の撮影のため、篝火を使用していない。



Courtesy of BFI National Archive

ウミウが魚をくわえているようす。ウミウは魚を頭から「鵜呑み」する。ウミウの胸に白い羽が少しみえることから、この個体はまだ若いと考えられる。後ろには風折り烏帽子に漁服姿の鵜匠が座っている。



Courtesy of BFI National Archive

『日本のアイヌ』の映像について

解説：森岡健治（平取町立二風谷アイヌ文化博物館長）

1. 国立映画アーカイブより『日本のアイヌ』についての情報照会(2020.9.8)

2. 株式会社東京シネマ新社 岡田一男氏によるコメント (別紙資料1)
 一般社団法人日本映像民俗学の会第41回二風谷大会での発表要旨
 (2018.10.20~21)

3. 「日本のアイヌ」が撮影された場所と内容について (結論) 図1~3
 場所：北海道沙流郡平取町(平村コタンの長老平村ペンリウク(1833-1903)宅前)
 内容：舞踊と儀礼

4. 撮影以前(明治期)の平取【蝦夷地から明治期へ】
 - 1869(明治2)年 開拓使設置。蝦夷地を「北海道」と改称。
 - 1871(明治4)年 戸籍法制定。アイヌを「平民」に編入。苗字が付けられる。
 開拓使、布達によりアイヌの人たちの葬儀の際の家送り、女子の入れ墨、男子の耳飾りを禁止し、農耕、日本語の習得を奨励する。
 - 1878(明治11)年 イザベラ・バード(英国女性旅行家)が来日し函館を経て平取コタンへ
 (ペンリウク宅滞在) 『日本奥地紀行』(別紙資料2)
 - 1879(明治12)年 ジョン・バチェラー(1854-1944 英国人の聖公会宣教師)が平取コタン
 を訪問。アイヌの長老平村ペンリウク宅に3か月滞在してアイヌ語を学ぶ。
 『蝦和英三対辞書』(1889年)
 - 1880(明治13)年 佐瑠太学校平取分校(義経神社前)設置にペンリウク尽力
 - 1893(明治26)年以降 義経神社前の写真
 - 1895(明治28)年 ペンリウク宅前の写真(北海道大学図書館所蔵)
 - 1901(明治34)年 平取コタンの写真(米国ペンシルバニア大学ハイラム・ヒラー撮影)
 - 1903(明治36)年 平取コタンの写真(ブロニスワフ・ピウスツキ撮影)
 - 1903(明治36)年 平村ペンリウク没
 - 1904(明治37)年 没後のペンリウク宅前のバチェラー(フレデリック・スター撮影)
 セントルイス万国博覧会(平取アイヌ→セントルイス)
 - 1908(明治42)年 平取コタンの写真(アーノルド・ゲンテ撮影)
 - 1913(大正2)年 『日本のアイヌ』(米国シーリグ・ポリスコープ社)

5. 「日本のアイヌ」から得られること

- ・ 女性の衣装 → 「チカラカラベ」(写真1)と呼ばれる切伏刺繍が施された袷の着物で、平取の特徴的な紋様であることは明治期の写真と比較してもうかがえる。また、頭に巻いている「ヘコカリブ」という鉢巻きも女性特有の無地の鉢巻き。よく「マタンブシ」という刺繍が施された鉢巻きが一般的のように思われるが、元来、刺繍が施されたものは女性が男性にプレゼントして身に着けるもの。
- ・ 舞踊の特徴 → 3種類の踊りが見られるが、アンナホーレ(鳥の舞)とホリッパ(輪踊り)は現在と共通する。
- ・ 男性の衣装 → 「カパラミブ」(写真2)と呼ばれる白地の切抜紋様を張り付けた木綿衣で平取の特徴的な紋様である。また、頭に冠した「サパンペ」の先端には熊を象ったものがつけられているが、これも沙流川流域のアイヌの特徴的なもの。
- ・ 儀 礼 → 男性が持っている「トゥキパスイ(捧酒箸)」(写真2)は、神へのお祈りをする際に神と人間の仲介として使用する道具で、箸の先に杯の酒をつけて神々にお神酒をあげ、人間の願い事を伝えるために使用する。
- ・ 入 れ 墨 → 口の周りの入れ墨は1871(明治4)年以降、同化政策により禁止されているので、この映像を撮影したころには高齢者は入れ墨が遺されている可能性があるが、若い女性は撮影のために入れ墨のように描いていたのではないかと思われる(写真3)。
- ・ 建物や背景 → 写真1の左の端(矢印)はペンリウクが住んでいた建物と思われる。その場合、ペンリウク宅の背後(東側)の沙流川は左から右に流れており対岸の山の景色などもよく似ている(写真4)。
- ・ 撮影方向 → ペンリウク宅前での撮影だとすると、太陽光線による陰影などから午後に西から東に向かって撮影したと思われる。

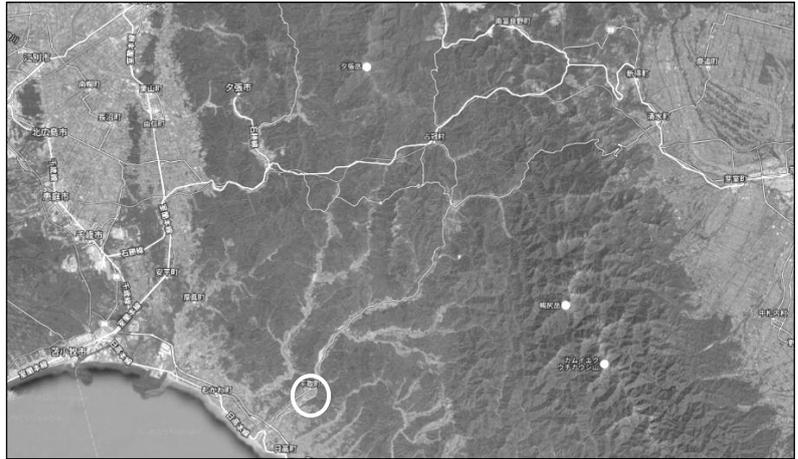
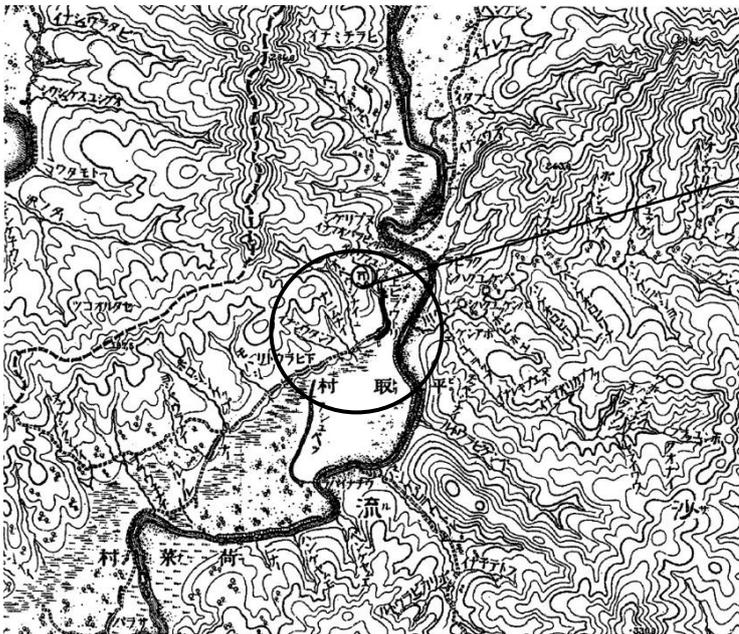


図1 平取町の位置



𠄎 義経神社

図2 明治29年仮製五万分の一図



𠄎 義経神社

平村ペンリウク宅

図3 平村ペンリウク宅の位置

写真1 「チカラカラペ」と「ヘコカリフ」



Courtesy of BFI National Archive

写真2 「カパラミフ」と「サパンペ」・「トウキパスイ」



Courtesy of BFI National Archive

写真3 口の周りに



us of Japan 仮MIX

Courtesy of BFI National Archive

写真4 撮影地点の背景



別紙資料1

誰が撮ったか「日本の滅び行く民族アイヌ」

この英国映画協会 (BFI) 国立映画TVアーカイブス所蔵のフィルム断片は、運営が終わって久しいオックスフォード大学社会人類学教室マーカス・バンクスらが立ち上げた映画誕生から50年間の社会人類学的に有意義な映画作品の所在情報データベース・ウェブサイト「HADDON」において、1910年代前半に沙流川流域で記録されたものとされていた。BFIによると、この映画断片の寄贈者はスイスのイエズス会で、ドイツ語字幕版であるが、トップクレジットの「セリグ・ポリスコープ」は、当時シカゴに在住した制作会社である。

一方、同時期、北海道で調査活動していた人物に、シカゴ大学教授の日本学者フレデリック・スターがいる。彼は助手に映画を撮らせていたというが、未だ彼と関連するアイヌの映画は見つかっていない。この画像が、スターと関連するという確証はないが、可能性はあるかと思う。フレデリック・スターは、白老に行っているし、平取に詳しいジョン・バチラーからも色々な助言を得ていたことが知られている。

19世紀末から20世紀初めは帝国主義の時代だった。欧米列強各国は海外に植民地を経営し、そこで得た文物を収集して博物館に陳列して、競って自らの成果物を誇った。映画はそうした繁栄を誇示する格好のツールだった。またこの時代はジャポニズムの時代でもあり、日本は欧米諸国の興味の対象でもあった。西欧人からアイヌが注目されたのは、彼らにアイヌが極東の人種的孤島に生きる白人種の一員であり、怒涛のごとく押し寄せる黄色人種の大波に飲み込まれようとしているという幻想があったからだ。そこで決まり文句が、「滅び行く民族」なのである。

この映像を入手した当時、英国へ行ってBFIで直接保存フィルムを調査する機会が無く、技術的には英国側にお任せとなったが、サイレント・フレームの35mmフィルムを、アカデミーフレームゲートで、24コマ/秒ドライブでテレシネするという杜撰な作業をされた。デジタル処理で速度調整を行ったが、画面の失われた部分は、いかんともし難い。

株式会社東京シネマ新社 岡田一男

一般社団法人日本映像民俗学の会 第41回二風谷大会「アイヌと北方文化」上映作品要旨より(2018. 10. 20~21)

追記：映像の入手。2002年7月に入手、同年、札幌と横浜で行われたマンロー展における横浜、神奈川県立歴史博物館での講演会で、マンローが英国に送った「カムイ・イヨマンデ」とともに上映しています。また、この映像のコピーは、北海道立北方民族博物館の映像収集資料V14.02.として運用されています。

別紙資料2

明治初期の沙流川流域の風景『日本奥地紀行』（イザベラ・バード著 高梨健吉訳 平凡社 2006）より

私が佐瑠太を出発するときは、三頭の馬と、案内人である馬上のアイヌ人とともに出た。平取までずうっと、道は人のよく往来する道であった。道は、佐瑠太を出るとすぐに森林の中に入り、最後まで森林の中を歩いていた。森には葦草が豊富に茂り、道を通る馬上の私の帽子よりも高かった。道幅は十二インチにすぎず、草がはびこっているの、夜露にぬれた草の葉を、馬は絶えずかき分けて進む。私も、間もなく肩まで濡れた。森林の樹木は、ほとんどが柏と榎だけである。紫陽花属の蔓草が、白い花を咲かせながら樹木に一面に絡みついている場合が多かった。

…森林は、暗くて非常に静かである。この細い道が縫うように中を通っているが、他にも獵師が獲物を求めて通る小路もある。この「街道」は、深い沼地に入っていくこともあり、また木の根を丸太にしてお粗末にかけ渡してあるところもある。…私の馬が非常にひどい沼地で胸まで沈み、まったく抜け出せなかった。私はその頭を這い上がり、馬の耳を越えてようやく大地に跳び上がった。

私は二人の少年に案内してもらい、丸木舟に乗って、佐瑠太川をできるだけ上流に遡ることにした。この川は美しい川で、筆舌に尽くしがたいほど美しい森や山の間をくねくねと曲がっている。

今まで誰一人として、この暗い森につつまれた川の上の舟を浮かべたヨーロッパ人はいない。私はこの数刻を心ゆくまで楽しんだ。あたりは深く静まりかえり、淡青の青空が浮かび、柔らかに青いヴェールにつつまれて、遠くは霞み「鈍化」されている。ニューイングランドの晩秋の小春日和のようなすばらしさであった。

1914年日本の軽業師たち ― ヨーロッパで活躍していた日本人軽業師・曲芸師たち群像 ―

解説：大島幹雄（サーカス学会会長）

1914年欧州に滞在していたサーカス芸人

ドイツに拘禁された芸人

藤井廣吉(軽業芸人) 松井繁次郎(軽業芸人) 小沢龍太郎(芸人) 沢田豊(芸人) 鈴木繁(芸人)
 高島桂(芸人) 高橋安造(芸人) 出口幸太郎(軽業芸人) 出口寿次郎(軽業芸人) 中山文吉(芸人)
 西村勇(芸人) 西村貞雄(芸人) 野田松次郎(軽業芸人) 濱村慶三郎(軽業芸人) 濱村浩前(軽業芸人)
 林春吉(軽業芸人) 松本留次郎(興行師)同妻同娘ルイゼ 水谷清元(芸人) 山本金太郎(軽業芸人)
 山本長吉(芸人、妻同伴) 山本エルマ(山本長吉妻) 横田カヨ(芸人、横田権次郎妻) 横田権次郎(芸人)
 横田捨吉(芸人) 横田延雄(芸人) 吉田亀次郎(軽業芸人)

奥田辨次郎の報告による欧州で仕事をしていたサーカス一座

[英国で仕事をしていた一座]

横田組(12名) ・ 濱村組(7名) ・ 山形組(5名) ・ 二見組(7名)
 安藤組(6名) ・ 岡部組(7名) ・ 両国組(7名)
 山本小芳組(22名) ・ 福島組(4名)

[それ以外の欧州各国]

光田組(美津田)(2名) ・ 山本(穂つかい)(1名) ・ 荒山(1名)
 天花(4名) ・ 青木組(7名) ・ 日の出組(3名) ・ 花子組(3名)
 曾我組(2名) ・ 小天二(7名)
 [その他(奥田談にはなく、新聞検索によるもの)]
 Fuji・Mizuno(7名) ・ NI-KO

海を渡ったサーカス芸人参考図書

大島幹雄 『海を渡ったサーカス芸人―コスモポリタン沢田豊の生涯』(平凡社 1993)
 大島幹雄 『明治のサーカス芸人はなぜロシアに消えたのか』(祥伝社 2013)

高野広八 『広八日記―幕末の曲芸団海外巡業記録』(飯野町史談会 1977)
 三原文 『日本人登場―西洋劇場で演じられた江戸の見世物』(松柏社 2008)
 宮永孝 『海を渡った幕末の曲芸団―高野広八の米欧漫遊記』(中央公論社(中公新書) 1999)
 宮岡謙二 『旅芸人始末書―異国遍路』(修道社 1959)
 山田稔 『鳥潟小三吉―海を渡った軽業師』(無明舎出版 1988)
 倉田喜弘 『海外公演事始』(東京書籍 1994)
 小山騰 『ロンドン日本人村を作った男 謎の興行師タナカー・ブヒクロサン1839-94』(藤原書店 2015)
 村田寿美 『幕末の下級武士はなぜイギリスに骨を埋めたのか』(祥伝社 2015)
 奈良岡聰智 『八月の砲声』を聞いた日本人 第一次世界大戦と植村尚清「ドイツ幽閉記」(千倉書房 2013)
 河合勝・長野英俊・森下洋平 『近代日本奇術文化史』(東京堂出版 2020)

『ピクチャレスク・ジャパン』 『京都の祭』 『鶺鴒飼』 『日本のアイヌ』 補遺

作成：富田美香(国立映画アーカイブ)

1. 『ピクチャレスク・ジャパン』 *Japon Pittoresque* について

(1) パテ・フレール社の作品データベース(<http://filmographie.fondation-jeromeseydoux-pathe.com>)によると、日本以外にも以下、多数の“Pittoresque”作品が製作・公開された。

1905年	11月 Ceylan, vécu et pittoresque
1907年	2月 Java pittoresque, 4月 Japon pittoresque / Canada pittoresque, 12月 Smyrne vécue et pittoresque
1908年	6月 Naples pittoresque
1909年	5月 Kiev pittoresque, 6月 Constantinople pittoresque, 10月 Les Pyrénées pittoresques / Biarritz pittoresque, 11月 Zanzibar pittoresque / Tiflis pittoresque
1910年	7月 Venise pittoresque
1911年	6月 La Hongrie pittoresque - A travers la Tatra
1912年	2月 La Bretagne pittoresque, 4月 La Crimée pittoresque, 7月 La Catalogne pittoresque / La France méridionale pittoresque, 8月 Tasmanie pittoresque / La Côte d'Azur pittoresque
1913年	1月 Tananarive pittoresque, 5月 Ceylan pittoresque / Le Caucase pittoresque, 8月 Le Jura pittoresque, 9月 La Sicile pittoresque, 10月 Les Côtes pittoresques de la Catalogne
1914年	1月 Calcutta pittoresque / La France pittoresque - Excursion en cornouailles (basse Bretagne), 2月 La France pittoresque - Excursion dans le Cotentin / La France pittoresque - Une étape de la route des Alpes, de Grenoble à Aix-les-bains, 3月 La France pittoresque - Promenade en basse Bretagne, 4月 La France pittoresque, la vieille Bretagne, 5月 L'île de Wight pittoresque / La France pittoresque, excursion dans les Alpes dauphinoises / À travers la Normandie pittoresque / La France pittoresque - Quelques coins des Vosges, 6月 La France pittoresque, à travers le Quercy / La France pittoresque - La Vallée de la Jonte / Naples pittoresque / La France pittoresque, autour du Puy-de-Dôme, 10月 L'Andalousie pittoresque, 12月 Sites pittoresques et historiques des de Paris jardins
1915年	1月 Tjipanas pittoresque, 3月 Buittenzorg pittoresque / L'île de Luçon pittoresque, 5月 L'Algérie pittoresque : la province d'Oran, 6月 La Chine pittoresque : visite à une pagode de cuivre
1916年	6月 La Catalogne pittoresque, 8月 L'Algérie pittoresque (la ville de Constantine)
1918年	4月 Le Loir et cher pittoresque, 10月 L'Eure et le loir pittoresques
1919年	4月 Séville pittoresque

(2) トーマス・アーマツ・コレクション (*Thomas Armat Collection*, 1894 - ca. 1900 / NATIONAL ARCHIVES CATALOG <https://catalog.archives.gov/id/786>) と同一の映像について

① *Japanese Scenes* (1894-1900) に、『日本の学童たち』の映像あり。

<https://catalog.archives.gov/id/89042>

② *JAPAN, EGYPT, ETC* (1894-1900) に、『ピクチャレスク・ジャパン』に含まれている盆栽市、奈良公園 (鶴、鹿)、児童たちの見学、大阪 (道頓堀)、隅田川 (VHS『キネマの夜明け 100年前の世界 VOL2 撮影隊ニッポンに行く』では大阪の西長堀としている)、傘張り、横浜の葬列、羅宇屋、蕎麦屋がある。

<https://catalog.archives.gov/id/89040> * youtube もあり。

(3) 隅田川の場面は、以下の日本橋区通・室町と思われる。



日本橋区通/室町『最新東京名所写真帖』(1909、明治42)
(『写真の中の明治・大正 — 国立国会図書館所蔵写真帳から —』
<https://www.ndl.go.jp/scenery/data/458/>)

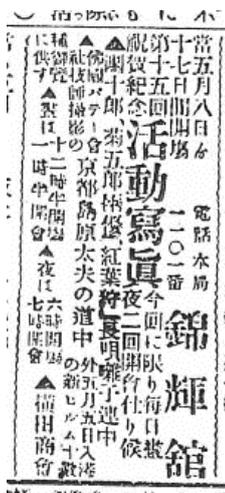
2. 『京都の祭』 (*La Fête du riz à Kyoto- Japon*) について

前述のパテ・フレール社作品データベースによると、『京都の祭』の内容は稲荷祭のみと思われる。

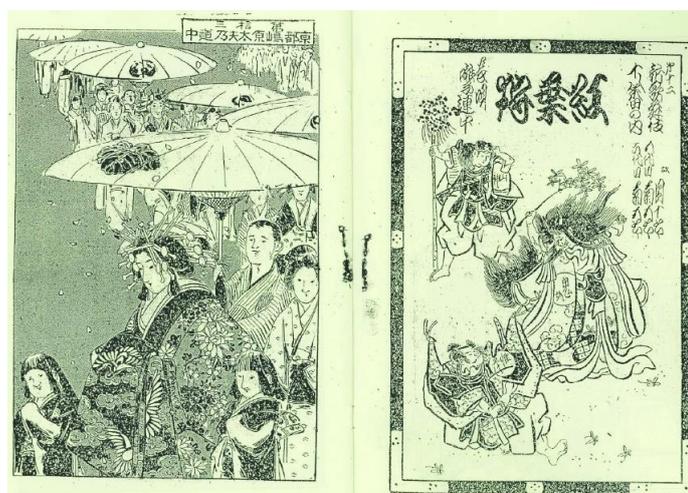
<http://filmographie.fondation-jeromeseydoux-pathe.com/8702-fete-du-riz-a-kyoto-japon-la>
島原の太夫道中と長浜曳山祭は、*Japon en fête* (1907, パテ・フレール社、撮影：アンドレ・ルグラン) の内容に、太夫道中と、芝居をする山車の記述があるため、*Japon en fête* の映像と思われる。

<http://filmographie.fondation-jeromeseydoux-pathe.com/917-japon-en-fete>

島原の太夫道中については、『京都島原太夫の道中』題で、1908 (明治41) 年5月8日から錦輝館にて、「第十五回祝賀紀念 活動寫眞」で「佛国パテー會社技師撮影の種」として「他五月五日入港の新ヒルム」とともに団十郎・菊五郎の『紅葉狩』と上映された。『紅葉狩』は31日まで日延べ上映されたが、『京都島原太夫の道中』が広告に掲載されていたのは5月20日までで、月末まで上映されたかは不明。



『都新聞』掲載広告
(明治41年5月8日)



『第十五回祝賀紀念 活動大寫眞繪本筋書』(横田商會、錦輝館) より
(国立映画アーカイブ客員研究員 本地陽彦所蔵)

[追記] 1908年4月22日の島原太夫道中を横田商會が撮影したという記事が『日出新聞』(1908年4月23日付)に掲載されていたことから、本作の太夫道中ならびに *Japon en fête* は1908年作品の可能性が高い。

3. 『鵜飼』について



Courtesy of BFI National Archive

「長良杉山」の法被からも、長良川での撮影と推定できる。

「鵜飼」の映像は、吉澤商店の目録（『明治卅九年四月改正活動寫眞器械同フィルム（連続寫眞）定價表』）に制作年は不明だが『岐阜長良川ノ鵜飼』が掲載されている。内容は、長良川の橋を上流に望み下流にて5艘の鵜飼舟が篝火を焚いて1人12羽の鵜を使って下る、というもので、映画と幻燈の種板にするために昼に撮影したと書かれている。見物の屋形船まで出て、舟の先には2名の芸者が写っている旨の記述があることから、本作とは異なると思われる。

ちなみに、千葉伸夫『チャップリンが日本を走った』（青蛙房、1992年）によると、チャップリンも、1936年5月の来日時に長良川で鵜飼を見物した。

4. 『日本のアイヌ』に関連して

1910年にロンドンで開催された日英博覧会の余興場には、「アイヌ村落」とは別の「活動写真」部に以下の映像が吉澤商店から出品された可能性がある。

「日英博覧会に渡航するアイヌの一行は去る十五日午前十時より目黒行人坂上吉澤商店活動写真撮影所にて例の熊祭を撮影された、当日の来客は南條博士、各新聞編集局員、等にして随分珍しき見物であった、中にもアイヌ君が長い刀をギラリと引抜き物凄いやうな声を出して跳ね回り時々妙な質問をする「声が映るでせうか」映らぬと聞いて大きな声で唄ってもよいと言い出したのは当日の御愛嬌であった、撮影後一同は浅草に赴き活動写真、曲馬等を見物した（後略）」（『彙報 アイヌ人の活動撮影』『活動写真界』第6号18頁）

ピクチャレスク・ジャパン ―世界が見た明治の日本―
上映作品解説資料

2021年3月31日発行

解説協力：伊藤廣之、平野正裕、米川智司、村上忠喜、卯田宗平、森岡健治、大島幹雄

発行：国立映画アーカイブ

* 「ピクチャレスク・ジャパン ―世界が見た明治の日本―」ウェブサイトは[こちら](#)

* 掲載内容の一部およびすべてについて、権利者の許可なく第三者の利用に供することを固く禁じます。詳細は[サイトポリシー](#)をご覧ください。